

■創刊 ちょっといい話 1話

使えるようになった電子レンジ

「またまずい弁当持ってきたんか」

「わしは食べんけ、いらんのにのぉ」

88歳のHさんは、お弁当をお届けに行くと、いつもこんな調子です。唯一の家族である娘さんが少し離れたところに住んでいるため、Hさんは毎日の食事を、半年近く宅配弁当である当店に依頼していました。

「まずい」「いらん」という言葉どころか、いつもお弁当は残ったままで回収する容器の中には、一口だけじったおかずが残っていたりします。

半分以上残っているお弁当箱を見ながら私は「そんなに口に合わないなら、注文しなかったらいいのに…」という少し嫌な思いで、毎日お届けしていました。

そんな毎日が続き、いつも通りお届けした日のこと

「また、今日もまずいの持ってきたか、その辺に置いてくれ」

私は嫌な思いが吹っ切れ、どうにかしたいという想いが突然湧いてきました。

「Hさん、どういうふうに不味いですか？ 薄いですか？ 濃いですか？」

と一歩踏み込んで尋ねるとHさんは、

「味がどうこう以前に、冷たい飯は食えん」

と答えてくれました。

『お弁当が嫌だったわけではない、“冷たいご飯”が嫌だったんだ』

ということを理解した私は、まずは電子レンジで温めることを提案してみました。

しかし、Hさんは一人になってからは電子レンジを使ったことがないらしく電子レンジ自体の使い方が解らない様子でした。そんな事なら話は簡単です。

「それなら…」と、私はお弁当を配達に来たついでに温めることを提案しました。

「勝手にしろ」といった感じでHさんは頷いて、部屋に戻っていきました。その日は私が電子レンジでお弁当を温め、一声掛けてHさん宅を後にしました。

次の日、いつも通りお弁当をお届けに行き、いつも通り昨日分のお弁当の容器を回収しようとしました。手に取ると回収するお弁当の容器が軽いことにすぐに気がつきました。

私は嬉しくなり

「Hさん、全部食べられたんですね！おいしかったですか？」

と聞くと、Hさんは

「温めたらまああの味やったの」

と少し恥ずかしそうに嬉しそうに答えてくれました。半年近く毎日のようにお会いしていたHさんの笑顔を初めて見ることができました。

次の日、お弁当と一緒に「電子レンジの使い方」というメモ書きを用意しました。

“手動を押す→1分を押す→スタートを押す→ビビビと鳴ったらOK”といった簡単なものですが、Hさんが自分で電子レンジが使えるようにと、電子レンジに貼り付けて、それを見ながらHさんに操作してもらいました。

その日からHさんは自分でお弁当を温めて、ほとんど毎日完食してくれるようになっています。

娘さんに「俺は電子レンジが使えるぞ」と自慢げに話されているHさんの話を後日、娘さんから聞きました。

私の誕生日のときには、庭で獲れたというみかんをスーパーの袋いっぱいプレゼントしてくれました。

「いっぱいあるから、お前にもついでにやるわい」

相変わず不器用な感じでしたが、Hさんなりの感謝の表し方なのかと、ありがたく頂きました。

